

低年齢で帰国した児童の第二言語能力

—リテラシーの観点から—

谷口ジョイ（静岡英和学院大学）

1. 研究の背景及び目的

かつて帰国子女は、日本の教育現場において異質な存在として問題視され、他の生徒との徹底的な同化を求められてきた。しかし 80 年代に入ると、その高度な外国語力が評価されるようになり、「新たな特権層 (Goodman, 1990)」と称されるまでになった。帰国後多くの子どもたちは現地で獲得した言語の保持・伸長の問題に直面するが、帰国子女のことばをめぐる議論は近年下火となっている。¹ これまでの帰国子女の言語喪失研究においては、海外滞在年数や帰国時の年齢といった数値化しやすい要因が主な変数として扱われてきた。一方で、子どもたちを取り巻く家庭環境や人的ネットワークといった社会的要素については精査されることがなかった。また口頭産出能力における統語的、形態的な正確さや複雑さがどのように変化するかという問題が広く関心を集めてきたが (Yoshitomi, 1994)、帰国子女が海外で習得したリテラシー能力については、これまで研究の対象とされてこなかった。しかし帰国児童は、海外滞在中、知識の獲得、新たな概念の構築、情報の共有や問題の解決などを第二言語によるリテラシーを用いて行っており、リテラシー能力の保持は重要な研究課題の一つである。

本研究の目的は以下の問いに答えることである。

RQ-1: 調査協力者が海外で獲得した英語リテラシー能力は帰国後どのように変化するか。

RQ-2: 調査協力者の英語リテラシー能力の保持・伸長にはどういった要素が関わるのか。

2. 研究方法

調査協力者は海外生活を通じて日本語と第二言語である英語を習得している 8 名の帰国児童 (4 組の兄弟姉妹) である。調査にあたっては、以下 5 項目をすべて満たす児童を選定した。(1) 調査開始時、日本の公立小学校に通っている、(2) 両親ともに日本語母語話者である、(3) 子どもたちの第一言語は日本語である、(4) 海外在住時の教育言語は英語であった、(5) 帰国時に、年齢相応の英語リテラシー能力を身につけていた。詳細を表 1 に示す。

表 1 調査協力者

調査協力者		年齢	渡航時	帰国時	滞在期間	滞在地
兄弟 1	Sou	10;7	6;4	10;7		米国
	Rin	8;3	3;11	8;3	4;4	
姉妹 2	Eri	9;11	4;4	9;4		UAE
	Saya	7;3	1;8	6;8	5;0	
姉妹 3	Meg	11;0	1;3	9;6	8;3	米国
	Rico	8;3	born	7;0	(7;0)	
姉弟 4	Nana	9;9	5;0	9;9		米国
	Ash	7;11	3;2	7;11	4;9	

¹ Goodman (1990) によれば、80 年代半ば、異文化間教育学会には約 170 名の会員がおり、うち 3 分の 1 は帰国子女を研究対象としていたという。一方、昨年度の本学会における帰国子女に関連した研究発表は 81 件中 0 件であった。

本研究では、2年間あるいは3年間の読解力査定に加え、約7年間の観察により、調査協力者の英語リテラシー能力を質的に記述している。

表2 調査方法

データ収集	媒体	情報源	情報
Developmental Reading Assessment (DRA)	録音・録画	帰国児童	子どもの英語リテラシー能力, 読書への興味・態度, 音読, 理解力, 読解カストラテジー
アンケート	紙	保護者	家族構成, 言語環境
インタビュー	録音	帰国児童 保護者	二言語使用に対する態度, 第一言語発達・第二言語保持, 人的ネットワーク, リテラシーに対する支援
観察	録音・録画 紙	帰国児童 保護者	家庭におけるリテラシーの機能, リテラシー活動への保護者の参加, 保護者とのインタラクション
読書記録	紙	帰国児童	帰国後のリテラシー活動, 読書量や傾向 読解カストラテジー
学校の成績 標準テストの結果	紙	帰国児童	子どものリテラシー能力レベル, 教員のコメント (子どもの個性, 読書に対する意欲・態度)

3. 結果とまとめ

RQ-1: 音読能力については, Rin (SP1 弟) にのみ顕著な喪失が見られた。物語を予測する能力については, Rin に帰国後1年で喪失が見られ, 次いで Sou (SP1 兄) も1年6か月で喪失が現れた。物語を再生する能力に関しては, 帰国後1年で Rin, Sou ともに喪失が見られたが, 兄の方がその程度はゆるやかであった。また, Ash (SP4 弟) は帰国後3年目にわずかにスコアが低下した。物語を解釈する能力は, Rin に帰国後1年で, Sou に1年6か月で喪失が見られた。また, Ash は帰国後2年目からわずかな喪失が現れた。

RQ-2: 兄弟姉妹は, 家庭環境, 言語環境が同一もしくは類似しており, 在留期間や帰国後の経過年数に関しても差異がないため, 帰国後の言語保持に影響する要素として「帰国時点の年齢」についての再検討が可能である。本発表における兄弟姉妹のうち, 年齢の低い方の子どもたちは, 言語保持の程度を左右するとされる境界年齢 (Schmid, 2006) に帰国時点で達しておらず, 言語保持が困難であるとされるが, Saya (SP2 妹), Rico (SP3 妹), Ash (SP4 弟) のリテラシー能力には顕著な喪失が見られなかった。これは, (1) 家庭において遊びや楽しみのためのリテラシー活動が英語によって行われていたこと, また, (2) 英語を用いた人的ネットワークの保持や構築がなされ, 社会的なやりとりを目的とした英語によるリテラシー活動が行われていたこと, (3) 保護者が英語のリテラシー保持に肯定的な態度を示し, これらを支援していたこと, (4) 子ども自らが, 与えられた環境の中で, 必要に応じてリテラシー能力を取捨選択し, 主体的にリテラシー活動に携わっていたこと, といった要因が関係していると考えられる。

【参考文献】

- Goodman, R. (1990). *Japan's 'International Youth': The Emergence of a New Class of Schoolchildren*. Oxford: Clarendon Press.
- Schmid M. S. (2006). Second Language Attrition. In Brown, K. (Ed.), *The Encyclopedia of Language and Linguistics* (pp. 74–81). (2nd ed). London: Elsevier.
- Yoshitomi, A. (1994). *The attrition of English as a second language of Japanese returnee children*. Unpublished doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.